

青年期の成長不安・抑制不安を規定する要因の検討¹

— 自我の強さ・自尊感情の観点から —

筑波大学心理学系 山本 誠一

The relationship of ego strength and self esteem to positive anxiety and negative anxiety in adolescence as determinant factors.

Seiichi Yamamoto (Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan)

This study aimed at examining the relationship of ego strength and self esteem to 2 distinct aspects of anxiety (positive anxiety, negative anxiety) in adolescence. Two anxiety scales and three other scales (Barron's Ego strength scale, Adolescent ego strength scale and Rosenberg's self esteem scale) were administered to 231 undergraduates. Adolescent ego strength scale is for use with normal adolescents.

The results indicated the followings.

- 1) The students with high ego strength (Barron's) showed low negative anxiety while those with low ego strength showed high negative anxiety.
- 2) The students with high Adolescent ego strength showed high positive anxiety and low negative anxiety.
- 3) The students with high self esteem showed high positive anxiety and low negative anxiety.

Key words : anxiety, ego strength, self esteem, adolescence

青年期は、これまで「第二の誕生」とか人格形成の時期と称され、また近年でも第二の分離個体化期 (Separation-Individuation Process) として把える視点の理論・実践両面での妥当性が支持される (Kroger, J.F., 1985; Levine, J.B., Green, C.J., & Millon, T., 1986; Levitz-Jones, E.M. & Orlofsky, J.L., 1985; 高橋, 1989) など、この時期に世界で唯一の存在としての個性化や自己実現の欲求・衝動が強くなることが指摘されてきた。このような青年期において、これまで親などからの一時的な借り物の価値観や物の見方から離れて、自分らしい独自のものを追及し獲得形成していく過程 (一種の創造過程) で生ずる不安は青年期に特徴的なものと考えられる。山本は、従来の不安を抑制不安 (人間的成長によりネガティブな意味をもつ不安)、上述の青年期の自己実現や人格

形成期に特徴的な不安を成長不安 (人間的成長によりポジティブな意味をもつ不安) として分類し、この両不安に関して様々な観点から検討を行ってきた。(1988, 1989, 1990a, 1990b, 1991a, 1991b)

青年が今までの自分の殻から脱皮しようと、自分にとって不慣れな新しいことに取り組み始めて不安になる時、それが成長不安 (不安だが逃げるわけにはいかない、やらねばならない。不安があるからやりがいがあがる) へと傾斜するか、抑制不安 (不安なので出来ない、しない、逃げてしまう) へと傾斜するか、という両不安の比重決定の観点は重要と思われる。この比重決定に規定的な影響力をもつことが推測される人格的な要因は様々考えられるが、本研究ではその中でも、より基礎的で安定したものとして青年の「自我の強さ (Ego strength)」及びその「自尊感情 (Self-esteem)」に着目し、その強弱・高低の程度により、成長不安・抑制不安の各々がどのような影響を受けるかについて検討することを目的とす

¹ 本研究の一部は、日本発達心理学会第2回大会において発表されている。

る。

<方法>

茨城県内の国立大学の大学生231名(男138名, 女93名)に対して1990年9月初旬に, 山本(1988)の成長・抑制不安の両尺度(それぞれ10項目, 15項目の計25項目)に加え, 自我の強さを測定する尺度として, 1)Es スケール(Ego strength scale; 本研究ではBarron,F. (1953)の68項目のうち, 小川(1965)による35項目; Appendix 1 参照)および 2)一般青年の考える「自我の強さ」概念に基づいて作成された「青年自我強度」²の尺度(山本(1991), Appendix 2 参照)を, さらに自尊感情を測定するRosenberg(1965)の自尊感情測定尺度(星野(1970)による10項目)を実施した。なお, 以下ではEs スケールで測定されるものを「Barronの自我強度」とよんで, 「青年自我強度」と区別した。

<結果と考察>

分析に際して, Es スケールの得点, 青年自我強度の得点, 自尊感情測定尺度得点各々を, 段階評定の合計得点の意味・得点の分布・群内の人数を考慮しつつ, 低中高の3群に分類した。

(1) 自我の強さが成長・抑制不安に及ぼす効果の検討

① Barronの自我強度について(Fig.1)

成長不安・抑制不安それぞれについて, 自我強度

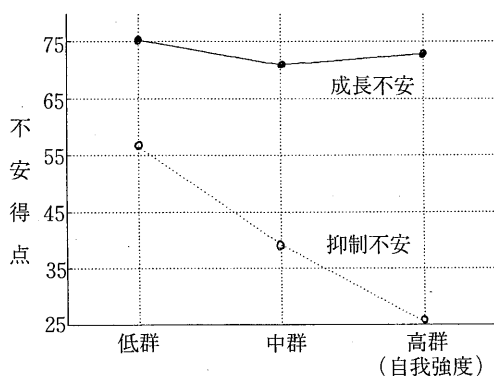


Fig. 1 Barronの自我強度と成長不安・抑制不安

² 「青年自我強度」尺度の作成に関しては, 当時筑波大学人間学類学生(心理学主専攻)星ゆかりさんの多大なる協力を得た。ここに記して感謝します。

(低中高3群), 性(男女)を要因とする2元配置の分散分析を行ったところ, 成長不安では2要因の主効果, 交互作用とも有意にはならなかった。一方抑制不安については自我強度の主効果のみが有意($F=79.58, df=213/2, p<.01$)となった。これに最小有意差法;LSD法($p<.05$)による多重比較検定を行った結果, 3群(平均 $56.53 > 39.12 > 25.36$)の間すべてに有意な差が見られた。

これらの結果から以下の考察が可能であろう。まず成長不安については, Barron.Fの自我強度によって規定されるとは言い難いこと, 一方, より病理的な性質をもつ抑制不安はBarron.Fの自我強度により規定される面が大きいことを示唆することが考えられる。これはBarron.Fの自我強度が心理療法の予後評定の重要な指標になるとされる潜在的な自我の強さの測定が目的である点や, これは自我の強さの存在ではなく, 特殊な自我の弱さの欠如であるとするCrumpton,E. et al.(1960)・小川(1965)の指摘を勘案すれば妥当な結果とも考えられるだろう。

② 青年自我強度について(Fig.2)

成長不安・抑制不安それぞれについて, 青年自我強度(低中高3群), 性(男女)を要因とする2元配置の分散分析を行ったところ, 成長・抑制両不安とも青年自我強度の主効果が有意(順に $F=26.26, df=2/207, p<.01$; $F=19.24, df=2/207, p<.01$)となった。そこでさらに両不安各々について最小有意差法;LSD法($p<.05$)による多重比較検定を行った結果, 成長不安では低中高群のすべての群間に有意差($39.59 < 46.65 < 49.74$)が認められ, 抑制不安でも低中高群のほぼすべての群間(中-高の群間だけ $p<.10$ で有意傾向)で有意差が認められた。 $(54.35 > 42.90 > 39.13)$

これらの結果は, 青年自我強度が高くなるほど, 成長不安は高くなり, 一方抑制不安は低くなることを示すものであると考えられる。

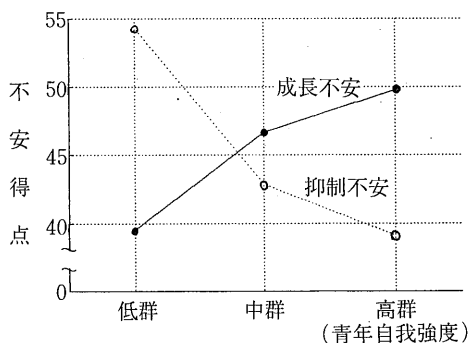


Fig. 2 青年自我強度と成長不安・抑制不安

Table 1 二種の自我強度と成長・抑制不安との相関

自我強度／不安	成長不安	抑制不安
Barronの自我強度	-.073	-.688**
青年自我強度	.476**	-.445**

** $p < .01$

ここでBarronの自我強度および青年自我強度と成長・抑制不安との相関(Tab.1)をも考慮すると、Barronの自我強度が抑制不安とは比較的強い負の関係があるものの成長不安とは関係がなく、一方青年自我強度の方はやはり抑制不安とは比較的強い正の関係があるものの、加えるに成長不安とも比較的強い正の関係が認められる。このことは両自我強度の大きな差異と考えられる。これらの結果は、青年の不安が成長不安となるか抑制不安となるかを規定する要因として自我の強さをとらえる時、Barronの自我強度の高さは、青年の不安が抑制不安になりにくい傾向を、一方青年自我強度の高さは、むしろ青年の不安が成長不安になりやすい傾向をもつことを支持するものである。さらにここでBarronの自我強度の高さが、青年の不安が抑制不安になりにくい傾向と関係するという結果は、Barronの自我強度が直接的ではないが、青年の不安が成長不安となっていく時の基礎的な前提条件となることを意味するものと考えられはしないだろうか。Barronの自我強度が、一方向的な自我の強さの程度や存在ではなく、特殊な自我の弱さの欠如であるとするCrumpton.E. et al.(1960)・小川(1965)の指摘も、この考察の妥当性を支持するものと思われる。

(2) 自尊感情が成長・抑制不安に及ぼす効果の検討 (Fig.3)

成長不安・抑制不安それぞれについて、自尊感情(低中高3群)、性(男女)を要因とする2元配置の分散分析を行ったところ、成長・抑制両不安とも自尊感情の主効果が有意(順に $F=3.29$, $df=216/2$, $p < .05$; $F=41.22$, $df=216/2$, $p < .01$)となった。さらに両不安各々に最小有意差法; LSD法($p < .05$)による多重比較検定を行った結果、成長不安の3群(平均 $70.0 < 71.87 < 76.12$)では低群と高群の間に、抑制不安では3群(平均 $52.96 > 39.33 > 23.61$)の間すべてに有意な差が見られた。この結果は自尊感情が高くなるほど、成長不安は高くなり、抑制不安は低くなることを示している。これは自分自身に対して好意的で、尊敬すべき価値ある存在と感じていることが、

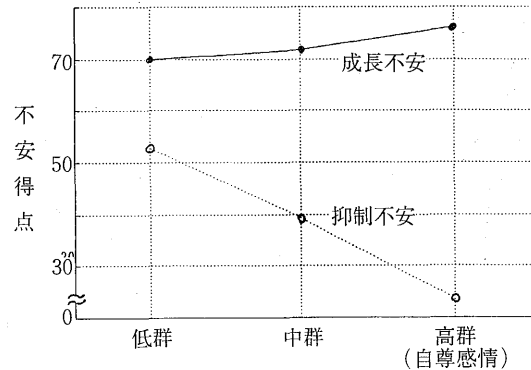


Fig. 3 自尊感情と成長不安・抑制不安

不安な事態に際して抑制不安・成長不安のどちらかに傾斜するかを規定する上で重要な一要因であることを支持するものと考えられるだろう。

<総合考察>

本研究では成長・抑制不安の規定要因について、自我の強さと自尊感情の観点から検討が進められた。その過程でいくつかの点が明らかにされたが、これを踏まえた上で、さらに成長・抑制不安研究を展開させるモデルが提出された。(Fig.4)これは青年の人格的成長を説明する一つのモデル(試案)であり、今後さらに検証や修正・改変をくわえねばならないものである。が今回の研究の位置づけや今後の成長・抑制不安研究を見通す上で、役立つと思われるので、あえて提出した。必ずしも不安がなければ成長しないと言うことはないが、特に青年の場合、何か新しいことを始めるときに、意識せずともどこかに微かでも不安があると考えられる。それが良い意味でも悪い意味でも青年を人格的に変容させるものになるととらえ、これを図示したものである。

この図を概説すると、[不安-安心]というサイクルにも、大別して2通りが考えられる。一つは[(成長)不安-(積極的)安心]というサイクルを相対的により多く繰り返して人格的に成長していく場合、他方は[(抑制)不安-(消極的)安心]というサイクルの方を相対的により多く繰り返して人格的成長が抑制されてしまう場合である。今回の研究では、▶印の部分に当たる規定的な要因の検討を行ったわけである。

今後は成長不安の規定要因に関して、自己実現欲求などの人格的要因や、試行性・活動性・持続性・計画性等の行動的要因の検討、さらに抑制不安から成長不安への移行変容に直接関わる要因という視点

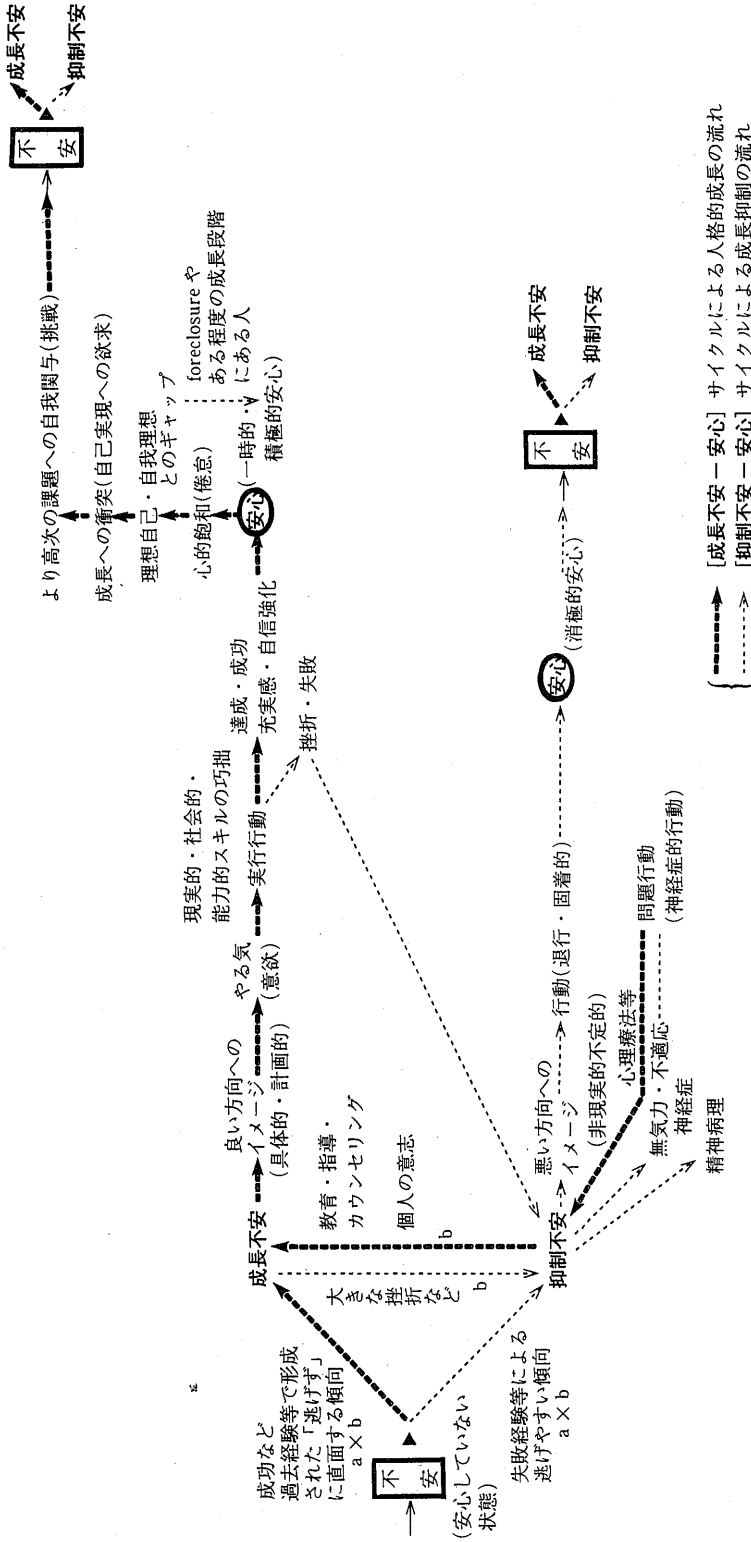


Fig. 4 [不安-安心] サイクルによる人格的成長モデル(試案)

不安

注1)

この箇所はシーソーと同様の原理で比率の差によって、成長不安に傾くか抑制不安かが決定される分岐点の意味をもつ。それまでに形成されてきた不安に耐え得る力(自我の強さ等の不安耐性力)の程度が、この箇所に规定的な影響力をもつと思われる。

注2) 上記の分岐点でどちらの不安に傾くかや、抑制不安と成長不安への移行・変容に強い影響力を持つような规定的要因に関しては、大きく2大別されるところと考えられる。つまり、a: 生まれもつての資質(親からの遺伝的傾向)や生育環境などの変化がたい要因と、b: 他からの働き掛けや本人の意志的努力・自覚などで変化しやすい要因である。

からの検討, 低次(下位)や高次(上位)の成長不安など成長不安の質的な違いやその発達・変容の検討等が, 課題である。

要 約

本研究の目的は, 山本(1988)による青年期の不安の二側面(成長不安と抑制不安)とパーソナリティの基底面的側面としての自我強度・自尊感情との関係を検討する事であった。そのため両不安尺度とともに自我強度や自尊感情を測定するための尺度(F.BarronのEgo strength scaleの小川による日本版, 青年自我強度尺度, Rosenbergの自尊感情測定尺度)が大学生231名に対して実施された。その結果, Barronの自我強度得点の低い青年は抑制不安が強く, 高い青年は抑制不安が弱いこと, 青年自我強度得点の高い青年は成長不安が強く, 抑制不安は弱いこと, また自尊感情の高い青年は成長不安が強く抑制不安は弱いことが明らかとなった。

文 献

- Barron, F. 1953 Some Test correlates of Response to Psychotherapy. *Journal of Consulting Psychology*, **17**, 235-241.
- Barron, F. 1953 An Ego-Strength Scale Which Predicts Response to Psychotherapy. *Journal of Consulting Psychology*, **17**, 327-333.
- Barron, F. 1955 Changes in Psychoneurotic Patients With and Without Psychotherapy. *Journal of Consulting Psychology*, **19**, 239-245.
- Crumpton, E. et al 1960 A Factor Analytic Study of Barron's Ego Strength Scale. *Journal of Clinical Psychology*, **16**, 283-291.
- 遠藤辰雄(編) 1981 アイデンティティの心理学 ナカニシヤ出版
- 星ゆかり 1991 青年の自我強度概念の特質 - 大学生を対象として - 筑波大学人間学類卒業論文
- Kroger, J.F. 1985 Separation-individuation and ego identity status in New Zealand university students. *Journal of youth and adolescence*, **14**(2), 133-147.
- Levine, J.B., Green, C.G., & Millon, T. 1986 The separation-individuation test of adolescence *Journal of Personality Assessment*, **50**(1), 123-137.
- Levitz-Jones, E.M. & Orlofsky, J.L. 1985 Separation-individuation and intimacy capacity in college woman. *Journal of Personality and Social Psychology*, **49**(1), 156-169.
- 小川捷之 1965 自我の強さ(Ego Strength)の測定に関する研究 - その1 - 東京教育大学教育学部紀要 教育相談研究, **11**, 107-122.
- 小川捷之 1966 自我の強さ(Ego Strength)の測定に関する研究 - 文献的研究 - 東京教育大学教育相談所紀要 教育相談研究, **7**, 67-84.
- 返田 健 1986 青年期の心理 教育出版
- 高橋蔵人 1989 青年期における分離個体化に関する研究 心理臨床学研究, **7**(2), 4-14.
- 上田吉一 1973 精神的に健康な人間 川島書店
- ホワイト, R.W. 中園正身(訳) 1985 自我のエネルギー - 精神分析とコンピテンス - 新曜社
- Wirt, R.D. 1955 Further Validation of Ego-Strength Scale. *Journal of Consulting Psychology*, **19**, 444.
- 山本誠一 1988 青年期における不安の二側面 - 成長不安と「抑制不安」の検討 - 筑波大学修士論文(未公開)
- 山本誠一 1989 青年期の不安と人間的成長 - 「成長不安」尺度の検討, 日本教育心理学会第31回総会発表論文集, 207.
- 山本誠一 1990a 青年期における成長不安と悩みとの関係 日本発達心理学会第1回大会発表論文集, 153.
- 山本誠一 1990b 青年期の成長不安と対人態度 日本心理学会第54回大会発表論文集, 143.
- 山本誠一 1991a 青年期における成長不安と抑制不安の相互作用に関する検討 - 人間的成長性との関係について 筑波大学心理学研究, **13**, 155-160.
- 山本誠一 1991b 青年期の成長不安の規定要因 - 自我の強さ・自尊感情に関する検討 日本発達心理学会第2回大会発表論文集, 214.
- 山本誠一 1991 青年期の不安による成長モデル 日本発達心理学会第2回大会ラウンドテーブル「青年期の発達に関わる要因を考える」配布資料

Appendix 1

Barronの自我強度(小川による35項目)の一部

R:逆転項目

- 1) 身体の機能と生理的安定性
 - ・ここ数年だいたい丈夫だ。
 - ・よく下痢をする。R
 - ・音に対して敏感である。R
- 2) 神経衰弱と引きこもりがちな傾向
 - ・私は非常に考え込むたちだ。R
 - ・くよくよすることがよくある。R
- 3) 宗教に対する態度
 - ・私の罪は、許されないと信ずる。R
- 4) 道徳的態度
 - ・異性に心をひかれる。R
- 5) 現実感覚
 - ・ちょっとの間何も出来なくなり、まわりのことがわからなくなることがある。R
 - ・時々急に笑ったり泣いたりしてとめることができない。R
- 6) 個人の適合性と物事に対処する能力
 - ・私の計画がむずかしすぎてあきらめねばならないことがよくある。R
 - ・へなへなと気がくじけてしまうことがある。R
- 7) 恐怖症的傾向, 幼児的な不安
 - ・火がこわい。R
 - ・真夜中によく恐ろしくなった。
- 8) その他
 - ・家族の誰かがひどく神経質だ。

Appendix 2

青年自我強度の項目例

・向上心が強い。・意志が強い。・困難にくじけない。・自分に自信が持てる。・積極的である。・生きがいを持っている。・独立心が旺盛である。・個性的である。・忍耐力がある。・立ち直りがはやい。・失敗を恐れない。・リーダーシップがとれる。・悲観的でない。・頑固である。・神経がずぶとい。・視野が広い。・目立ちたがりやである。・情緒が安定している。・他者を信頼できる。・強情である。こわいもの知らずである。現実的である。